OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	土左日記の読み方
Author(s)	山脇, 毅
Citation	語文. 1952, 6, p. 25-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

土左日記の読み方

山脇毅

読み方といふのは、ある詞を音読するか、訓読するか、清んで読むか、濁って読むか、上につけて読むか、下につけて読むかといふ、解釈上のことである。

土左日記は、大正十四年に前田家の定家自筆本が活版で飜刻され、昭和三年にその複製が刊行され、同七年に図書寮本の本文が示され、同九年に三条西家本の複製が刊行され、同十六年に青谿書屋本の複刻が刊行され、同二十四年に図書寮本が一層正しい形で刊行され、同時に近衛家本も校合の形で示された。この間に白石勉氏、橘純一氏、小室由三氏、池田亀鑑博士、中村多麻氏、山田孝雄博士等の研究が発表され、特に池田博士の昭和十六年二月刊行の「古典の批判的処置に関する研究」の大著によって、貫之自筆本はほゞ完全に再建せられて、本文に関する古来の数多き疑問は、大体一掃されたのである。本稿はこの本文によって、読み方について、古来異説のある点を拾ひ上げて、些か私見を加へたものである。

講師、むまのはなむけしに、いでませり、ありとあるかみしもわらはまで、ゑひしれて、一文字をだにしらぬものしがあしは、十文字にふみてぞあそぶ　（十二月廿四日）

とある中で、「ものしか」の読み方について数説がある。原田清氏は昭和十六年八月の国語と国文学で、古来の註釈を概観して、

A　「し」を強意の助詞と見て「ものが」の意にとるもの

B　「し」を「ら」の誤読誤写と見るもの

C　「か」を「も」の誤読誤写と見るもの

D　「もの」と「しか」とを切離して「しがあし」と下につゞけて考へたもの、猪熊浅麿氏と折口信夫氏とにこの説がある

の四説に要約せられた。Aは今日までの註釈書に最も多い説である。岸本由豆流の考証には「考ふるに、けふしまれ、けふしこそなどいふし文字と同じくて助字にもやあらん」といひ、香川景樹の創見には「ものがといふに、し文字をくはへて、語勢をつよめたる、当時の平語とみゆ」といひ、山田博士は、索引によると「し」を間投助詞と見て居られる。BとCとは、有力な証本の数多く見られる今日では、問題にならない。Dの折口博士の説といふのは、昭和四年発行の国文註釈叢書の土佐日記考証の補註に

ものしがのがは、旧説通りとすれば、ものらがでなくては通らな

い。主格の助辞ならば、がと云うてもよい筈だが、こゝは、関係代名詞風な用ゐ方から、ながらに近い意味にうつつてゐるところだから、どうしても、のである筈だ。けれど、全々立場をかへて、ものとしがとを切つて考へると、（善次郎案）そがに通ずるしがと、とることが出来る。やゝ古風な感じである。この辺では、それ自身のと云ふ位である。但し、……しらぬものをうけるつゞきが並通でない。必ず、一文字以下、十文字云々までの文句に、当時の諺の類を踏まへてゐるにちがひない。（折口）

と出てゐるのが、それであらう。誤植もあるやうだが、私には意味が十分分らない。原田氏自身はD説を支持して、大略、

「しが」は「そが」の通音で、「其の者が」の意である。奈良朝時代に多い「しが」が、平安朝になつても使はれたかどうかの証明は、猪熊氏も折口氏もしてゐないが、落窪物語に、北の方が「あなわか〳〵しき昼寝や。しが身の程しらぬこそ、いと心憂けれ」といつて、落窪君をあざ笑ふところがある。「あゝばか〳〵しい昼寝だこと！　御自分の身の程を知らぬのにも困つてしまふ」といふ意味である。土佐日記の場合も「その手には一といふ字も知らぬ者が、さすがに学識高い住職殿にあやかつてか、御自分の足では、ちやんと十といふ字を書いて、千鳥足に躍り狂ふのも面白い」と解して差支ないことにならう。「しが」は「それが」の一般的意味から、侮蔑的嘲弄的な三人称所有格に局小されて使はれたやうである。だから「御自分の」といふアイロニカルな嘲弄的言辞が当てはまるであらう。

といふ意味のことをいつて居られる。「もの」で切つて「しが足」とつゞける説は、早く明治廿四年九月に成り、同十月に出版せられた小田清雄の校正傍註土佐日記に出て居る。即ち

文字　知　者　其　足　　文字　踏　遊
一もじをだにしらぬもの、しがあしは、十もじにふみてぞあそぶ

と句読し、傍註して居るのがそれである。鈴木千循氏の「土佐日記の話」は、昭和二年五六月頃に印刷されたものらしいが、本文を、

一文字をだに知らぬ者其が足は十文字にふみてぞあそぶ

とし、「ものしがハ中村義象主ノ説ニ同意シテ本文ノ如ク音読トセリ」と註し、一文字十文字モ同氏ノ説ニ同意シテ本文ノ如ク音読トセリ」と註し、「手デハ一ノ字スラ書キ得ナイト云フ者共ノ其レラガ却テ足デ十ノ字ヲ踏ミ出シテ即、千鳥足デ狂ヒ遊ブ状ハオカシイ事デアリマシタ」と訳して居られる。池田博士の本文研究年表によると、池辺姓のは大正二年、同四年、同十二年に出て居るが、之は小中村姓で名が出て居るから、恐らく明治廿四年九月から廿五年五月までに成つた土佐日記講義を指すのであらう。次に明治廿六年三月発行の石田道三郎の土佐日記講義には、

ものしがのしは、夫と指す意ありて、ぞに似たる語なり、云はゞ一文字を知らぬ者である、それが足は十文字に踏みての意なり。しを添ふるは其の必用ありて、語勢を強めんためなるに、従来此のしを休め詞など称して、意なき天爾波とせるは誤なり。不用の語ならんには、加ふるに及ぶまじ。

と釈してゐる。この解は、明治廿四年四月出版の言海に、

し（辞）〔夫ニ通ズルナルベシ〕第二類ノ天爾波、指ス意アリテぞニ似タリ、常ニ休メ詞トイフ、サレド自ラ意味アルナリ

と解釈し、語法指南に、

歌ノ五文字ノ句ニ「身にしあれば」ナド加フルコト常ナルガ、コ

レ、不用ノ語ナラバ、字余リニ加フルニ及ブマジ、必ズ其意義ヲ添ヘズシテハ、カナハヌ場合ナレバ、加フルナルベシ

と附記して居るのによったのであらうが、AD両説を混淆させたものである。猪熊氏の説といふのは、研究年表によって、明治卅年九月刊行の土佐日記講義であらうかと思ふ。

原田氏は昭和四年二月発行の橘純一氏校註の土佐日記を引いて居られないが、それには

「ものし」といふ語は、落窪物語、少将が落窪の君の袍を裂る手伝をする条に「猶ひかへさせたまへ。いみじきものしぞ、まろは」といふ用例がある。「ものし」は「物師」で、何か一つの技能に熟達した人をいふ語と思はれる。即ち「一文字をだに知らぬものしが」は、目に一丁字なき先生がといふやうなアイロニカルな語気に当り、「足は十文字にふみてそあそぶ」といふ酒落と相俟って、愈〻滑稽味を発揮してゐるのだと思ふ。

といふ橘氏の説が出て居る。「ものし」といふ詞は倭訓栞、雅言集覧、言海、日本大辞林等には出て居ない。俚言集覧には、物師と標し、色道大鑑を引いて、「物仕、男によらず女によらず、功者にして物ごとしなんのつゞまやかにとゝのふる人を指ていふ」と解して居る。大正八年出版の大日本国語辞典、昭和十年出版の大言海には「ものし」の詞を出して、前引の落窪の例を引いて居るが、土佐日記のこの文を引いて居るものは無いやうである。土佐日記のこの詞を「物師」の意と解したのは、橘氏が最初ではないかと思ふ。

三条西家本は、明応元年に実隆が貫之自筆本を書写したものを、天文廿二年に某が仮名一字をも変へずに書写したものであるが、之には「しらぬものしか」の下に朱点があって、天文頃には「しがあし」とは読まなかったらうと思はれる。三条西家本の朱点は、無論絶対的のものではないが、少くとも室町時代の読み方を示すものとして、軽々に看過すべきではないと思ふ。

以上の三つの読み方のうちで、橘氏の「ものし」を一つの名詞と見る説が最も穏当だらうと思ふだけで、これ以上にいふことが、私には遺憾ながら無い。

このうたを、これかれあはれがれども、ひとりもかへしせず、しつべきひともまじれゝど、これをのみいたがり、ものをのみくひてよふけぬ　（正月七日）

山田博士は、十二月廿八日の条に「酒よき物ども持て来て、船に入れたり、行く〳〵飲み食ふ」とあるのに準ぜられたのか、「物を飲み食ひて」と読んで居られるが、「のみ」は動詞ではなく、「是れをのみ痛がり」と同じく、助詞であらう。「さけよき物」ならば「飲み食ふ」であるが、歌主の持って来たのは破籠であるから「食ひて」だけでよからう。たとひ酒もあったにしても、「食ひて」の中に含めて、「これをのみ痛がり、物をのみ食ひて」と、対句のやうに読んだ方が、アイロニカルな表現であらう。

このうたぬしまたまからすといひてたちぬ　（正月七日）

傍点の所は「また罷らず」か、「まだ罷らず」か、「復罷らンず」か。多くの註釈書は、季吟の抄に「又やかてまいらんずるといとまごひして帰る也」と註してゐる通りに解して居る。富士谷御杖の燈には、

「また」は又の義にはあらで、「まだ」の義なるべし、「まかる」

は、こゝを退き帰ることをいふにて、「まからす」は未退の義なり、「す」は不の字の義なれば、濁りてよむべし。

といふ意味のことをいって居る。又別に「またまからす」と清んで読み、「らす」は「る」とつゞまる、即ち「まかる」の義で、「古言の格也」といふ説をあげて、「この説うけがたし」と否定して居る。「まからす」と清んで読むならば「まかる」の未然形に「す」をつけたので、使役か崇敬の意であらう。それを「まかる」を延べたのだといふ説は、なるほどうけ難い。「まだまからず」と読むのは「まだ帰るのではありません」と、座をはづす時の挨拶と見て、次の「まからずとてたちぬる人をまちてよまむとてもとめけるを、夜ふけぬとにやありけむ、やがていにけり」にも、よくつゞくといふつもりであらうが、座をはづす時の挨拶としては如何であらう。「まかる」は退出の意で、貴人の前を離れることであらうが、転じては、行く、来るの敬語にも使ったやうであるから、「またまからンず」で「また来ませう」の意にとれるし、又来るといって座を起った人が、座にかへるのを待ってよまうといって、中座しただけで、まだそこに居るのではないかと思って捜したが、歌主は、又来ませうといって中座したものの、夜が更けたからといふ心であったらうか、座をはづしたまゝ帰ってしまったと解せられよう。山田博士の註にもかうある。

「まからず」――「罷らむず」の約略にしてこの「罷る」は謙語にして、「罷らむとす」の意、来らむとする意「またまからず」は今の俗語にて「またきませう」といふ程の意。

はるのゝにてぞねをばなく、わかすゝきにてきる〳〵つんだるなを、おやゝまほるらん、しうとめやふらん、かへらや

（正月九日、船唄前半）

をどう読むか。若薄か、我が薄か、又わか薄にて切る〳〵か、わか薄に手切る〳〵か、まほるか、まぼるかの問題である。三条西家本は「わかすゝきにてきる〳〵つんだるなを」の上下に句読をうって、これだけを一句に読んで居るから、読み方の助けにはならない。

藤原惺窩の妙寿院本は「我薄ニテ手ヲ剪々」と読み、抄には濁点も解も無く、宝永四年再版の首書本は「わがすゝき」と読み、考証は「わがすゝきに手をきるをもいとはず」と解いて居る。創見は「若薄にて、かくも手をきる〳〵」と解し、その附録には「妙寿本、我すゝきにてとあるは訛也、我薄とつゞけん語勢、有べきならず、又自他をわけん事、こゝに用なし、然も、春の野につみて、我ならぬを、吾薄といふべけんや、もとより、春ならんには若薄なるべく、言がらもみやびたるをや」と論じて居るが、「わがすゝきにて」と読んだのは、証に「わか薄を我なりと秋成ぬしはいへり、それは、我薄とつゞく心にはあらず、薄に手きる〳〵わがつむだる菜をといはんを、上における心にみられたるなり」と解説して居る通りであらう。燈自身は、稚桜、わかなすび、若瓜の例をあげて、「若薄のかたをば予はめでたくおぼゆるなり」と結んで居る。田中大秀の解は「わかすゝきは、か字清みて、若の意とす、今年生の薄なり」と断じ、栗田寛博士の古謡集（国文論纂一四八一頁）は「わかすゝきにて」、高野辰之博士の日本歌謡史（三一頁）は「吾が薄にて」、橘純一氏、山田博士は「若薄」と当てて居られる。次に「て」を上につけて助詞と見るか、下につけて手と見るかである。従来の註解書

は、燈と山田博士とを除く外は、殆ど尽く「わかすゝきにてをきる〳〵」又は「わかすゝきにてきる〳〵」といふ本文によって居るから、之を問題にして居ないが、有力な証本はすべて「わかすゝきにてきる〳〵」となって居る。燈も山田博士も下につけて「手切る〳〵」と読んで居られる。

菜を摘んだのは「わが」といはなくても「われ」であることは分らうが、又春の野であれば、若薄とわざ〳〵ことわらなくても分らう。若とことわらなくても分る、又ことわったところで、特に効果的な意味を添へるでもない「わか」を薄につけるよりは、自分が苦労をして摘んだ菜であれば、「わが」として「摘む」の主語においた方が、ずっと効果的ではないか。又「手」と読むと意味はしっかりするが、それで船唄として謡はれるであらうか。「薄にて」といへば、手も切ったらう、足も切ったらう。

「まほる」を、燈には「まもる」と同じ詞ではあるが「たゞめをはなたずしてのみをる事をいふにはあらで、此女の労をおもひて、其菜をまもりをるといふにて、よろこべる形容にやあらむ」と解して居り、山田博士も「守るにて親の許に置きてあることをいふならん」といって居られる。この説では「まぼる」と濁るのである。

「むさ」の反は「ま」だといふので、「むさぼる」の約だとする説がある。之も濁る方である。又「ま」は発語か、「うまほる」の意かといふ説がある。「ほる」はほしがる意であるから、之は清んで読むのである。

「まほる」には他に例が見つからぬやうであるが、宇津保藤原君に、

かくてふし給へるほどに、まうほるもの、日に橘一つ、湯水ごうほらず云々、今はくはじとのたまひて、いさゝかなる物まうほらで、日頃へぬ。

といふ例がある。この「まうほる」は「まほる」を延べたものと考へられて居る。或は逆に、「まもほる」（創見）又は「まきほる」（秋成）の音便で、「まほる」はその略かも知れない。宇津保の例では、単に食ふとか飲むとかいふ意味らしい。さうすると、この船唄の「まほるらむ」も、次の「くぶらむ」と同じ意味で、造句の都合で、三五五四と配したのであらう。

以上を綜合して、この船唄全部を、から読んではどうかと思ふ。

春の野にてぞ、ねをば泣く。わが薄にて、切る〳〵、摘んだる菜を。親やまほるらむ、しうとめや食ふらむ。カヘラヤ。

よんべの、うなゐもがな、銭乞はむ。そらごとをして、おぎのりわざをして。銭ももて来ず、おのれだに来ず。

即ち、七五、七四六、八九、四、四六五、七九、七七と読むのである。三条西家本は、「かへらや」を上につけて、六節に読んで居る。「かへらや」は囃し詞であらう。正月廿一日の条の船唄にも最後について居るところから考へると、この前半と後半とは別々の唄ではないか。「かへらや」に「帰らむや」の意味があるとしても、後半の後につけて、「いつまで待って居てもつまらない、もう帰らうか」と解して差支ない。或は、もとついて居たのを、貫之が略したのではないか。貫之は「これならず多かれども書かず、これらを人の笑ふを聞きて、海は荒れども、心はすこしなぎぬ」と書いて居るから、二つと見てよいと思ふ。前半と後半とを関係づけようとするので、解釈に無理ができるのではないかと思ふのである。

もろこしとこのくにとはことなるものなれど（一月廿日）

傍点の所は、抄に「ことはことなる」とあるのに従ったか、多くの註釈書は「言葉異なる」又は「言は異なる」と解して、問題として居ない。これを「ことごとなる」と濁って読むと、当てる漢字は異事、事々、異々、事毎がある。山田博士は異事を当てられたが、之は「ほかの事」といふ意に解せられて、こゝには穏かでない。尤も山田博士は「ほか」といふ意味の場合には他の字を当てられるから、之は「かはって」といふ意味で当てられたのであらう。橘氏の当てられた異々は、まち〳〵別々といふ意味で、この方がぴったりしよう。事々や事毎は取上げるに足らない。青綺書屋本は、ひと〳〵、いろ〳〵、きる〳〵、うら〳〵、こゝろ〳〵、しば〳〵、ところ〴〵、ほと〳〵、まに〳〵など書いて居るから、一語ならば一こと〳〵なる」と書きさうなものである。こゝは定家本に「こと〳〵なる」と写してある外、有力な証本はすべて「こととなる」となって居るから、貫之自筆本も恐らくさうだったらう。定家は他の証本が「ふなうたうたひて」と書いて居る所を、「ふなうた〳〵ひて」と書いて居るから、必ずしも定家が「こととこと」を一語に読んだとはいへない。なほ青綺屋本、三条西家本の複製で見ると、上の「こと」は共に合字で、殊に前者は下の「こと」が少し離れて居て、一語とは思はれない書き方である。考証が、妙寿院本に「言殊ナル」とあり、抄に「ことはことなる」とあり、自分も「ことばことやうなれど」といふ異文を校合して居るのに引かれたのかも知れないが、「こと、ことなる」即ち「言、異なる」と読んで、「人の言語などはちがへど」と解して居るのが、最も穏当ではないかと思ふのである。

このわらは、ふねをこぐまに〳〵、やまもゆくとみゆるをみて、あやしきことうたをぞよめる（正月廿二日）

傍点の部分を、山田博士は「怪しき異歌をぞ詠める」と読んで居られる。こと人、ことひと〴〵、こともの、ことゞまり等には他の字を当てられたから、これは「変な普通とはかはった歌」の意にとられたので、「あやしき」は歌にかゝる修飾語になって居る。

古人はこゝをどう読んで居たか。先づ三条西家本には、「こと」と「うた」との間に朱点が見える。即ち「怪しきこと、歌をぞ詠める」と読んで居たのである。次に妙寿院本には「怪言哥ヲソヨメル」と漢字を当て、抄は之を採って「言歌とはたゞごとうたなどいふやうに、かざる事なく、ありのまゝによめる事なるべし」と解して居るが、燈は「言歌とかゝれたるは、あやしき言なる歌をといふ心なるべけれど、それは語をなさず」といって居る。真淵があやしきことにて、句をきるべし、漢文の例、物語などに多し、九歳ばかりなるわらはの、そのとしごろよりはをさなきうまれのものが歌をよみたるは、あやしき事かなと、詞をあやにいへるなり

といったことが考証に見え、宇万伎も真淵の説によったことが燈に出て居る。つまり国学が興った頃、三条西家本時代の読み方に復したわけである。その後は考証も真淵説により、燈は「あやしきことゝいふ一句をはさみてかゝれたるなり、あやしきことには歌をぞよめるといふ心にみるべし」といひ、創見も「怪しき事かな、歌をぞよみ出でたると也」といひ、解には

藤井氏云、云々ことと云さしたるやうなるは、歎息の意を含たる言なりといはれき、こゝもしかなり、哉字を加て心得べし、あや

しき事は、常は才覚無みゆる者の歌よみしを、いたく驚めでたる由なり

といって居る。

橘氏が、源氏葵巻、貫之の歌、この日記の「浪のたつなることゝうれへいひてよめる歌」（正月七日）、「この月までなりぬることゝなげきて」（二月一日）の例をあげ、「ねたき、いはざらましを」（二月七日）と、「こと」を略した例さへあることを挙げて、「こと」はすべて「ことよ」の意であるといって居られるのは、動かぬ説だと思ふ。なほ私が蛇足を加へるが、正月七日の条には「いとをかしきことかな、よみてんやは、よみつべくは、はやいへかし」といふ例があって、二月七日の例とは反対に、「こと」の下に「かな」までついて居る。

かぢとりのまうしてたてまつることは、このぬさのちるかたに、みふねすみやかにこがしめたまへと、まうしてたてまつる

（正月廿六日）

とある。燈の「ことは」の註に「かぢとりがぬさ奉るとて、神にいのり申す詞にはとの心なり、ことゝは片本に言とかける字の心なるべし」とある通りであらう。片本は片仮名本の略で、妙寿院本のことである。こゝは日本古典全書本に「言葉」と当ててある外、異説あるを知らない。

おひかぜのふきぬるときはゆくふねのほてうちてこそうれしかりけれ　（正月廿六日）

といふ歌について、創見には「うれしかり」の「かり」は濁りて唱ふべしといって居る。併し景樹は、定家本系統の抄に「ゆくふねも」とあるのに従って、「うれしがりけれ」と濁って読んだので、創見の附録にも

妙寿本、六帖に行く舟のとあるは訛也（中略）こは嬉しがりと濁るに心のつかざるより、解きわづらひて、のに直したるもの也

といって居るが、「行く舟も」は定家のみの誤写で、「の」の方が正しいことを知らなかったから、反対に「の」を訛と見たので、之を景樹の定説と見ることは、控へるべきである。燈は抄に従って、本文を「ゆく舟も」として居るが、

「ゆく舟も」を「の」とある本、その意大に異なり、「も」にしたがはゞ、舟中の人々の手を拍てよろこぶのみならず、舟までもよろこぶさまなる心となるなり、「の」にしたがはゞ、これはよせの「の」にて、ゆく舟の帆手うつごとく、舟中の人々、手を拍てうれしむ心となるなり、「の」もじにしたがはゞ、穏しかるべし、「も」じに従はゞ、下の「うれしかりけれ」の「か」もじ清みては、舟がうれしむ心とは聞がたければ、「か」もじにごりて「うれしがりけれ」とよむべし、しかれどもあまりにひなびたる詞つきなれば、猶「の」もじのかたにしたがふべくや

といって居るのは、穏健な説である。橘氏が定家本に従って「行く舟も」とし「うれしかりけれ」と清んで居られるのと、萩谷氏が「ゆく舟の」に従って「うれしがりけれ」と濁って居られるのとは、共に古人の説と全然反対である。

かくいひつゝくるほどに　（二月五日）

山田博士は「かく言ひ続くる程に」と読んで居られるが、これは

「かく言ひつゝ来る程に」と読むべきではないか。類例は、山田博士の本に、

かく言ひて眺めつゝ来る間に　（三三ノ九）
かく言ひつゝ漕ぎ行く　（二七ノ五）
かく歌ふを聞きつゝ漕ぎ来るに　（二二ノ五）
かく言ひつゝ行くに　（二二ノ一〇）

などがあって、何れも歌か詞かの次に来る句である。なほ「と」で受けたものの中には

と言ひつゝなん　（一四ノ一二）

のやうに、下の「来る」や「行く」の略されたものさへある。二月五日の条のも、「つゝ」を助詞と見る方が穏かであらう。

こゝろもとなさにあけぬからふねをひきつゝのぼれども、かはのみづなければ、ゐざりにのみぞゐざる　（二月九日）

傍点の所は、普通「明けぬから、船を牽きつゝ」と読んでゐるが、妙寿院本は「明ヌ虚舟ヲ引ツゝ」と読み、抄も之にならって「からふねは虚舟也、人乗ぬふね也」と註し、首書本は更に「水あさくてひき舟にしたる成べし、さればかろくせんとて、よの舟へものりうつりたるべし」と想像を加へて居る。さう読まうとすると、心もとなさの中に夜はあけて、九日になった、人々は船から下りて、から舟にして引きつゝのぼった意となるが、その前後の文に、舟から下りた様子も、他の船に乗りうつった様子も、徒歩した様子も、車に乗った様子もない。その後、考証の標註に見えるのであるが、契沖や入江昌喜によって正しく読みなほされた。それから「あけぬ」で句とする人は無い。

青谿書屋本は、嘉禎二年に為家が貫之自筆本を一字を違へず書写したものを、更に転写したものである。為家本は今所在不明であるが、仮名の字形、和歌の書き様等、すべて原本のまゝを損したものであり、青谿書屋本は又、為家本の単なる転写本ではなく、複製本とも云ふべき程に、忠実かつ厳密な態度で書写されたものであることが明かにされて居る。貫之自筆本のほゞ完全に再建されたのは、青谿書屋本の存在して居る為である。

青谿書屋本は漢字を使用することの非常に少い本である。従って貫之自筆本もさうであったらう。試に、最初の十分の一、真中の十分の一、最終の十分の一を取って、その中に使用してある漢字を数へてみる。但し日附はすべて漢字であるから、こゝには数へない。定家本は漢字が二百四字、三条西家本は百四十九字、図書寮本は五十四字であるのに対して、青谿書屋本は僅か二十四字である。

池田博士の平仮名字体統計表の附録の漢字表によると、青谿書屋本中の漢字は、日附を除くと、二十一語、三十三字、三十九回である。但し院は七十八頁に二度出て居るし、九十頁の「千とせ」を仮名と見て挙げて居られないが、九十二頁にあるのと比べると、漢字と見なければなるまい。従って二十二語、三十四字、四十一回とならう。

漢字の二十二語のうち、日記、講師、白散、宇多、明神、病者、院、故、中将、相応寺の十語は、必ず音読すべきものである。郎等を「をのこら」と読む人もあるが、「らうとう」と読むべきであらう。後のものだが、源氏玉葛、浮舟に例がある。「五色にいまひといろぞたらぬ」（二月一日）は、単に五種の色をいふのではない、

青黄赤白黒の五色を指す語であるから、当然音読すべきである。「一文字をだにしらぬものしが、あしは十文字にふみてぞあそぶ」（十二月廿四日）も、こゝでは文字の数をいふのではなく、一といふ文字、十といふ文字の意であるから、必ず音読すべきである。願は「いづみのくにまでとたひらかに願たつ」（十二月廿二日）「おばろげの願によりてにやあらん」（正月廿一日）の二つとも、神仏に祈願することであるから、音読すべきである。音読する例は竹取物語以下に多くある。池田博士の挙げられた他の六本も、すべて漢字である。必ず訓読しなければならないのは、日、子日、人、子、千である。これ等は画の少い字であって、貫之は平素の筆癖で、漢字で書いたのであらう。かう見てくると、貫之が漢字で書いた詞は、大体音読すべきではなからうか。

京は十二回出て来るが、他の六本も、すべて十二回とも京と書いて居る、「みやこ」と書いたのは一本も無い。「みやこ」は十一回出て来るが、之に都を当てた本はあるが、京を当てた本は一本も無い。写した人も、京と「みやこ」とを、意識して書き分けたのではないか。

万葉集の歌には、京を「みやこ」と読むのが十八首ほどあるが、「きやう」と読むのは一首も無い。「きやう」が歌語でなかったからであらう。前代の歌で京を「みやこ」と読んだからといって、土佐日記の散文の中の京を、同様に「みやこ」と読めといふのは無理であらう。「みやこ」と歌に詠みこんだのは五首あるが、京と詠みこんだのは一首も無い。やはり「きやう」が歌語でなかったからであらう。「日をのぞめばみやことほし」は詩の句であり、「みやこぼこり」は俗諺のやうなものであるから、「きやう」と変へることはできない。残りの四つは「あはぢのしまのおほいこ、みやこちかくなりぬといふことをよろこびて」（二月六日）「けふはみやこのみぞおもひやらるゝ」（元日）のやうに、他の人のことか、一同のことで誰彼なしの場合に使はれて居る。それが死んだ子のことになると、三回とも京と書き、いよ〳〵山崎に着いてからは、六回つゞけて京とばかり書いて居る。これだけの例ならば、「みやこ」は帝都又は帝都の方の意、京は京都のことで、感情の高まった時や、近くまで帰り、又京都に帰り着いた時に使ったのだともいへよう。京の残りの三回のうち、「京のちかづくよろこびのあまりに、あるわらはのよめるうた」（二月五日）は他の人のことであり、「をとこもをんなも、いかでとく京へもがなとおもふこゝろあれば」（正月十一日）と「むつきなれば、京のねのひのことといひでゝ」（正月廿九日）とは一同のことである。

私はこの三つの為に、貫之が京と「みやこ」とを書き分けた標準を立てることが出来ない。けれども五色、一文字、十文字、願のやうに、訓読もできる詞を漢字で書いて居るのであるから、この京も、同様に「きやう」と音読すべきではないかと思ふのである。「きやう」と音読する例は、伊勢物語以下、後のものには多い。

最後に「けふせちみすれば、いを不用」（二月八日）は、音読しても意は通じるであらうが、こゝは「もちゐず」と読むのが穏当であらう。貫之は平素漢文体の日記其他を書いて居た癖で、ふとかう書いたのではないか。

（昭和廿六九十八稿）

―関西大学講師―